

文／伊藤悠貴

チェロとピアノのための2つの小品 作品2 (前奏曲／東洋の踊り) (1891/1892)

ラフマニノフは幼少時から天賦の才を認められた作曲家でした。

18歳でモスクワ音楽院のピアノ科と作曲科を卒業、その際ほとんど授与されることのない「大金メダル」を与えられ(同期のA.スクリャービンは小金メダル—なんとという学年でしょう!)、卒業後すぐにグートヘイル社(モスクワの楽譜出版社)と契約を結びます。

間もなくグートヘイル社はラフマニノフが卒業制作の課題として作曲したオペラ「アレコ」と、「ピアノ協奏曲第1番 作品1」(もともとラフマニノフは“作品1”を「4つの小品」というピアノ作品(1887年)に付けていました)を出版しますが、その次に出版されたのがこの「チェロとピアノのための2つの小品」でした。

第1曲「前奏曲」は献呈を受けたチェリストであるA.ブランドゥコーフとラフマニノフ自身のピアノで1892年に初演されました。全体を通してチェロが美しい旋律を歌い、中間部で動きが増す部分でもそれは変わりません。第2曲「東洋の踊り」には異国風のテーマが与えられ、激しい中間部の後にはチェロの高音が再びテーマを奏で、ピアノの繊細な動きと相まってエキゾチックな美しさを味わうことができます。

幻想的小品集 作品3 (1892)から

エレジー 作品3-1 (伊藤悠貴編) / メロディー 作品3-3 / セレナーデ 作品3-5 (伊藤悠貴編)

「幻想的小品集 作品3」はラフマニノフの初めて出版されたピアノ独奏曲。5つの幻想曲からなり、第2曲には有名な「前奏曲(鐘)」を有します。全曲を通してメロディックな旋律が多く、チェロとピアノでの演奏にも適していると言えるでしょう。ラフマニノフのピアノによる自演録音が全曲残されています。

「エレジー」は美しくも悲愴感漂うメロディーと波打つもう一つの声部、そして情熱的なクライマックスを持ちます。自演録音では楽譜にない音が足されている箇所があり、本編曲に反映いたしました。「メロディー」はラフマニノフらしい旋律と、曲が進むにつれて変化していく段階

的なメインテーマの活用、オフビート三連符の和音で構成される美しさが魅力的です。最後の「セレナーデ」は曲の始まりで東洋的な色を感じさせますが、ギターのような伴奏が始まった途端にスペイン風の色を感じることができます。

「メロディー」と「セレナーデ」は、ラフマニノフが亡くなる3年前の1940年に大きな改訂がなされており、「メロディー」に現れる三連符和音のアルペジオへの置き換え、カデンツァの挿入など、また「セレナーデ」においてもより演奏効果の高い作品に仕上がっています。

本日演奏される「メロディー」(ヴラーソフ編)はオリジナル版、「セレナーデ」(伊藤悠貴編)は改訂版を元に編曲いたしました。

前奏曲 作品23-10 (1903)

バッハやショパン同様、ラフマニノフも24全ての調で前奏曲を残しました。ただラフマニノフの場合、一つの曲集で「24の前奏曲」を発表したわけではなく、前述の「幻想的小品集」第2曲「前奏曲(鐘)」(嬰ハ短調)を最初の前奏曲とし、後に書かれた「10の前奏曲 作品23」、「13の前奏曲 作品32」と合わせた3つの曲集によって全調24の前奏曲を仕上げました。

本日演奏いたします「前奏曲 作品23-10」は元々変ト長調で書かれていますが、A.ブランドゥコーフの編曲でト長調としてグートヘイル社から1905年に出版され、ラフマニノフ公認の編曲でした。

ロマンス (1890)

1992年に出版されるまで陽の目を見なかった「ロマンス」は、1890年の夏、ラフマニノフがまだ17歳の時にイワノフカの地で作曲されました。メロディーメーカーとしてのラフマニノフの才能は既にこの時期から顕著であったことが良く理解できる、作品番号が付く前の初期の作品です。

